

雑誌『日独文化』瞥見

上 村 直 己（熊本学園大学元非常勤講師）

Der Streifblick auf die Zeitschrift *Nichi-Doku-Bunka* (Die Japanisch-Deutsche Kultur)

von

Naoki KAMIMURA

目次

1. 『日独文化』とは
2. 発行状況
3. 雑誌創刊に至る日独文化協会の主たる事業
4. 創刊号について
5. 2号以降の主要記事、編輯後記
6. 終刊号について
7. 終わりに

1. 『日独文化』とは

財団法人日独文化協会は昭和2年（1927）の創立以来、諸事業を行って来たが、昭和10年（1935）の日独防共協定を経て、2年後日独文化協定が締結されるに及んでその役割は益々重大となった。それに応えるため定期刊行の機関誌『日独文化』を創刊するに至った。雑誌は季刊で、昭和15年（1940）4月の創刊号から同20年（1945）2月まで全16冊が刊行された。日独文化の理解と両国の親善のための記事で満たされ、同時に日独文化協会の諸事業について誌上で報道された。当時は日独両国とも戦時下にあり雑誌はその影響を色濃く反映していた。発売所は刀江書院（東京市神田区駿河台三ノ六）。

2. 発行状況

第1巻第1号～第5巻第1号（昭15・4～20・2）全16冊が発行された。

内訳

第1巻1号（昭15・4）	2号（昭15・8）	3号（昭15・10）	4号（昭16・1）
第2巻1号（昭16・6）	2号（昭16・7）	3号（昭16・10）	4号（昭17・1）
第3巻1号（昭17・4）	2号（昭17・9）	3号（昭17・11）	4号（昭18・3）
第4巻1号（昭18・9）	2・3合併号（昭18・12）		4号（昭19・7）
第5巻1号（昭20・2）			

3. 雑誌創刊に至る日独文化協会の主たる事業

1925 (大正 14) 年	ベルリンにて Japan Institut 設立
1927 (昭和 2) 年 4 月	財団法人日独文化協会 (Das Japanisch-Deutsches Kultur Institut) 設立
同 年	『日独文化講演集』第 1 輯刊
1931 (昭和 6) 年	丸山国雄『初期日独通交小史』出版
1932 (昭和 7) 年	百年祭記念ゲーテ研究
1933 (昭和 8) 年	大独逸国展覧会
同 年	友枝高彦『ナチス運動の社会学的考察』
1934 (昭和 9) 年 4 月	丸山国雄『日独交通資料』第一輯刊 (以後第六輯まで続いた)
1935 (昭和 10) 年 4 月	シーボルト資料展覧会 (日本医史学会、東京科学博物館共催)
1936 (昭和 11) 年 11 月	(日独防共協定締結)
1937 (昭和 12) 年 11 月	交換教授として工学博士伊東忠太ベルリンへ出発
同 年 同 月	日独文化展覧会出品目録
1938 (昭和 13) 年 9 月	交換教授として東京帝大経済学部教授荒木光太郎ベルリン着
同 年 11 月	同協定 2 周年に際し日独文化協定締結、雑誌『日独文化』 創刊決定
1939 (昭和 14) 年 2～3 月	伯林日本古美術展覧会
同 年 6 月	浜辺正彦訳『ベルツの日記』岩波書店出版
同 年	『日独文化講演集』第 13 輯刊
同 年	『独逸文神皇正統記』(ボーネル訳)
1940 (昭和 15) 年 4 月	『第一回独逸遣日使節日本滞在記』出版
1940 (昭和 15) 年 4 月	『日独文化』創刊

なお、昭和 10 年 10 月刊行の『本邦国際文化団便覧』(財団法人国際文化振興会)には日独文化協会について次のように紹介している。

日独文化協会 (財団法人) (Das Japan-Deutsche Kultur-Institut)

所在地	東京市麹町区日比谷公園 市政会館内 (電話 銀座三〇四一)
目的	日独文化の協同及び相互普及を図ること
事業	一、日独文化研究者の諸般の仲介 二、日独両国学生交換 三、日独両国に於ける特種科学の研究及び紹介 四、日独文化に属する研究資料の蒐集、展覧及び出版 五、その他理事会に於て適当と認むる事業 六、機関誌 1 「日独文化講演集」(邦文) 2 「日独叢書」(邦文) 3 “Japanisch-Deutscher Geistes Austausch”(独文)

役 員	会長 侯爵 大久保利武	理事長 高橋順次郎
	主事 グンデルト	友枝 高彦 ¹⁾
その他	創立 — 昭和二年（一九二七）四月八日	

機関誌として3種挙げているが厳密には正しくない。日独文化協会の機関誌は『日独文化』のみであってこの時点ではまだ刊行されていない。『日独文化講演集』は昭和2年に第1輯が出てより14輯（昭15）まで刊行された講演集であったが、『日独文化』が出るまでの繋ぎとして多少とも機関誌的役割も担っていた。他の2種については計画段階での総称であって、具体的書名は不明である。

昭和13年（1938）11月26日の大阪朝日新聞は日独文化協定の調印を記念して雑誌『日独文化』を創刊することに決定したと報じた。筆者はこれをインターネットで検索して知ったのだが、そこには次のように書かれていた。

日本の条約史上に一新紀元を画する「日独文化協定」は日独防共協定締結の二周年記念日の二十五日朝東京で正式に調印された日独両国は古くから医学、法学、文学、音楽などの方面で深い関係に結ばれていたが、防共協定の成立以来、特に文化親善にも拍車かけられ学者学生の交換青年団の派遣など世界的注目をひいているとき遂に日独文化提携はここに始めて条約化されたのだ、それによると日独文化連絡協議会が設置され具体的文化握手を進めるわけであるが、この方面で従来最も活躍していた日独文化協会（会長大久保利武侯）では歴史的協定成立を機会に事業を一層拡大強化することとなり、その他各方面にも積極的に日独文化親善の話題が生れている。

日独文化協会ではすでに数年前から両国教授、学生の交換を実施しているが、新協定があくまで精神を重んじ文化の神髄を基調としているため高等学校、専門学校などのドイツ人教師などについても今後は特に人物本位の選定が注目されるはずである。

同協会ではいま問題にしているのは日独書籍を交換で、東西の両為替管理国の不自由さを物と物の交換、たとえばドイツ書籍を輸入してその代金だけ絹でも送るという便法を本格的に協議している。一方翻訳権の問題、音楽関係の例の「プラーゲ旋風」²⁾もここに取あげられ、さらに来春ベルリンで開かれる「日本古美術展覧会」に日本代表で渡独する井上三郎侯は向うの博物館とも物々交換の相談をする予定である。

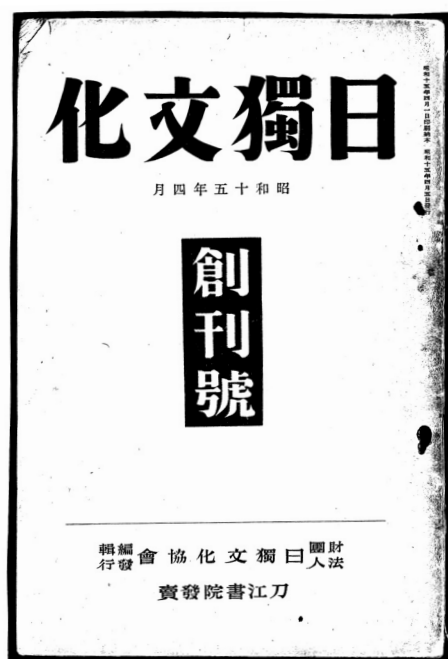
ドイツ文化紹介のためには協会内の図書を充実してこれを一般希望者の利用に公開、新刊紹介、批評などに力を注ぐ、文化協定調印を記念して雑誌「日独文化」を創刊することに決定、ドイツで発行の雑誌「日本」と呼応して文化親善譜を奏でる。（後略）

これを読むと、日独文化協会は創設以来様々な事業を行い多くの成果を挙げてきたが、日独防共協定を経て、その2周年記念として日独文化協定の成立を見たことは日本の条約史上画期的なことだったことが分かる。そうすると当然喜びと同時に協会の責任も大きくなった。その中から関係者の間で機関誌を持つ必要性が生じ、『日独文化』創刊の決定となった。機関誌『日独文化』に対する期待は大きかったが、直ぐには実現せず準備のために約1年半を

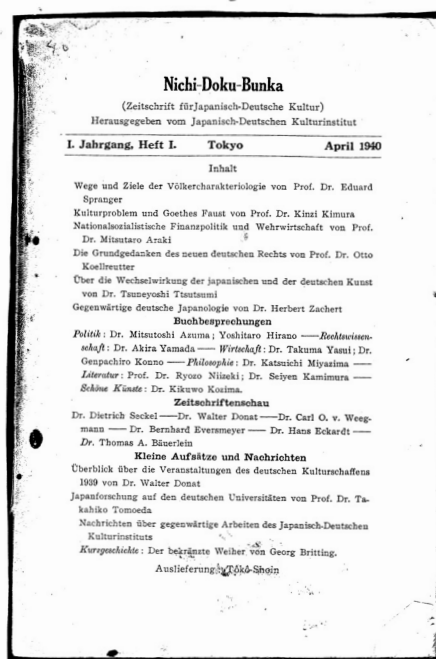
要した。

4. 創刊号について

創刊号 (第1巻第1号) は昭和15年 (1940) 4月5日に発行された。満を持して刊行されただけあって、約300頁の堂々たる内容となっている。巻頭には日独文化協会会長の侯爵・大久保利武による「発刊の辞」を掲げ、以下、外務大臣有田八郎、文部大臣松浦鎮次郎、駐日ドイツ大使オイゲン・オットがそれぞれ祝辞を寄せている。「編輯後記」には、こうある。



創刊号表紙



創刊号裏表

「日独文化」第一巻第一号 目次	
発刊の辞	會長侯爵 大久保利武 (四)
祝辞	外務大臣 有田八郎 (六)
祝辞	文部大臣 松浦鎮次郎 (八)
祝辞	駐日獨逸大使 オイゲン・オット (一〇)
民族性格學の進路と目標	E・シュラング (一三)
文化の問題とゲーテのファウスト	木村 謙 (一六)
ナチス金融政策と國防經濟	荒木 光太郎 (一八)
新獨逸法の根本精神	O・クルロイター (二〇)
日獨藝術交渉	鼓 常 (二二)
ドイツに於ける日本學の現状	H・ツァヘル (二五)
書評	
F・ゼムテ「第三帝國の社會政策」	山 吾 (二七)
判例民法註釋書第九版	安 山 (二八)
W・フロゲル「ドイツ國民經濟學の現状」	井 妻 (二九)
G・アレンヒト「戰爭經濟の一般行政機構」	野 源 (三〇)
「大獨逸國に於ける經濟指導」	今 郎 (三一)
雜誌紹介	
N・ハルトマン「可能性と現實性」	宮 上 (三二)
E・G・コルベン「ハイヤー」	新 關 (三三)
「新獨逸國家大系」	野 島 (三四)
Verhaltensschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte.	平 野 (三五)
Dichtung und Volkstum	野 義 (三六)
Nationalsozialistische Monatshefte. Berlin-Kom-Tokyo	野 義 (三七)
Zeitschrift für Geopolitik	野 義 (三八)
Volk und Reich	野 義 (三九)
Die Musik	野 義 (四〇)
Zeitschrift für Deutsche Forschungen und Fortschritte	野 義 (四一)
獨逸諸大學に於ける日本研究	友 枝 (四二)
一九三九年ドイツ文化事業概観	友 枝 (四三)
日獨文化協會最近の事業	友 枝 (四四)
「小説」花環の池	G・ブリタニング (四五)
寄稿家點	

創刊号目次

- ◇定期刊行の機関雑誌を持つことは多年本協会の要望するところであった。いま其の発刊を見るに至った喜びは譬ふべくもない。その産みの苦悩を償ふて余りあると言ふべきであらう。
- ◇固より、協会の意志と努力だけでは不充分であった。文化交換に理解ある日独両国政府当局と識者の好意ある支援があつて初めてこれは実現され得たのである。茲に本創刊号巻頭に外務・文部両大臣、駐日独逸国大使閣下の祝辞を掲ぐる事を得たのは本誌の光栄とするところである。
- ◇而して同時に、本協会の計画に賛せられ、創刊号に寄稿せられた筆者各位の好意に対して深厚の謝意を表するものである。
- ◇春と共に、日独文化交渉は、愈々^{たけなわ} 酣^{もくしょう} となり、我が国最初の日独学徒大会の開催は目睫の間に迫つてゐる。此の時本誌が創刊されるに至った意義は頗る重大である。
- (後略)

祝辞は概してどれも簡単なものであるが、それに比べて「発刊の辞」はかなり長文で、大久保利武の思い入れが強かったことが伺われる。ケンペル、シーボルトから始めて、明治以降の独逸学の発達を辿り、またドイツにおける日本学の進展に言及した後、大正末に至り両国間の文化交換の約が結ばれ、ドイツに日本学会、日本に本協会の設立を見るに至ったとし、次のように述べる。

爾来両協会は十三年余の久しきに亘り、相呼応し協力して相互の文化の歴史的研究を初め現在の国状の紹介に努め、これが為に両国民が精神的に物質的に相互に利益したところは頗る大である。本協会の事業は講演に、研究に、出版に、展覧会、音楽会、その他多方面であり、広範囲に及んで居る。而して我が協会は従来不定期にそれ等の研究を発表して聊か学界に貢献するところあつたのであるが、今や進んで一般の文化工作と共に定期的に機関雑誌を発行して一層その事業の拡張とその促進とを図ることとなった。思ふに我が国が独逸に教へらるゝことあると共に、独逸も亦我が国に学ぶべきものあるところにこの事業の意義と価値とが存するのである。蓋し国際間の親善も尊敬も高度の文化を保持するものの間に於て初めて成立つものであつて、本協会は常にその仲介者たりその促進者たることを庶幾するものである。而して吾人の目的にして次第に達せらるるならば、独り日独両国民の文化の向上と幸福の増進とに貢献するのみならず、進んで世界文化の進運と全人類の福祉とに寄与するところあるべきを信ずるものである。

今や雑誌初号の発刊に際し将来必ずや彼我文化の交換に貢献の多かるべきを祝福し、併せて社会一般の本会使命に此の上の御援助あらんことを希望して已まざる次第である。

大久保会長は若き日ドイツに留学、ハレ、ハイデルベルク、ベルリンの各大学に学び、ハレ大学で哲学博士を取得。明治27年帰国後、官界に入り、台湾総督府、内務省等に奉職。またその後鳥取、大分、大阪の各府県知事及び農商務省商工局長を歴任。晩年は錦鶏間祇候として広く各界に尽力した。昭和6年日独文化協会会長に就任以来、日独両国の相互理解に大きく貢献した。そうした彼だからこそ上記のような「発刊の辞」をものし得たのであろうし、機関誌『日独文化』の発刊を誰よりも喜んだのではなかろうか。

「発刊の辞」「祝辞」の次ぎの6編の論文は、一流の学者によるそれぞれ得意とするテーマを扱ったもので、かなり長いものが多かった。E・シュプランガー博士は当時ベルリン大学教授で、1937年末から38年末まで交換教授として滞日し、その間日本の哲学思想界に強い足跡を残した。この民族性格学に関する研究は、国民性や国民精神の研究に指針を与えるものだった。当時日本におけるゲーテ研究の権威だった東大の木村謹治の論文は、ドイツ文化の特質がゲーテのファウストにおいて如何なる形で表れているかを論じたものつのである。松本高校教師のH・ツァヘルトによる論文は、人物を中心にドイツにおける日本学についてかなり詳しく述べたもので、当時独国の日本学の現状と水準を知る好文献と言えよう。書評はいずれも当時の一流の評者によるもので読み応えがある。雑誌欄では9種の独文雑誌が紹介されている。いずれも専門的で高度な内容の雑誌である。Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichteは季刊で、ゲルマニストにとっては現在でも不可欠の研究誌だが、この時点で既に17巻目に入っていた。Die Musikについては日本音楽学者で京都ドイツ文化研究所理事兼主事H・エッカルトが担当している。最近日本では地政学という語が政治家やジャーナリストの間でしばしば用いられているが、元来この地政学はミュンヘン大学教授で日本学者でもあったK・ハウスホーファーが創始したもので、彼はこのZeitschrift für Geopolitikの発行人であったこともあり、1939年7月の段階で既に第16年第7号を世に出していた。友枝高彦の「独逸諸大学に日本研究」はドイツの大学における日本学や日本語教育の状況を網羅的に述べたもので、日本人講師についても言及しており興味深い。前記のツァヘルトの論文と合わせて読むと、当時のドイツにおける日本研究と日本語教育についての過不足名なく、全体像が得られ便利である。日独文化協会の理事の友枝は「日独文化協会最近の事業」も担当し、大独逸国展覧会、伯林日本美術展覧会、学生交換事業、交換教授などについて詳しく解説している。「一九三九年ドイツ文化事業概観」(ワルター・ドオナート)は、少し前にオーストリアがドイツに復帰したこともあり、実に多彩な文化事業(バイロイト音楽祭や、ザルツブルク音楽祭はほんのその一例)が紹介していて、改めてドイツが文化先進国であることを痛感させられる。

「寄稿家点描」は簡単なプロフィールであるがほとんど毎号載ったもので、今では全く忘れられた人もあり貴重な情報となっている。

最後には『花環の池』(ゲオルグ・ブリティン³⁾作、大山定一訳)という短編小説が載っている。この作品を掲載した意図は不明だが、訳者は「付記」で、「この『花環の池』一篇を読んだだけで、彼の自然や人間を見る率直な態度、ひいては彼のけれんのない作風のやうなものまで、幾らか想像が出来るとおもわれるのである」と述べている。大山定一はこの頃京大出身の独文学者として頭角を現しつつあった。

巻末には「『日独文化』創刊に当り協会々員を募る」と題する広告文が見られる。

5. 2号以下の主要記事及び編輯後記より

第1巻第2号(昭和15年8月5日発行)B・バウフ「ポツダムとヴァイマル」矢部貞治「ゲマインシャフトと政治」、第一回日独学徒大会として荒木光太郎「大会記録」K・ツァール「閉会の辞」、書評として今泉光太郎「K・ラレンツ『民族的法律思考の対象と方法』」崎村茂樹「H・マイヤー『ドイツ農業の構造と整備』」グラーフ・フォン・デュルクハイム「G・ウザーデル『規律と秩序』」佐藤新一「R・チャルナー『独逸文学に現れたる支那』」。雑誌紹介とし

て W・ドオナアト「Nationalsozialistische Monatshefte」D・ゼッケル「Deutsche Vierteljahrschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte」B・エーヴェルスマイヤー「Volk und Reich」H・エッカルト「Die Musik」T・A・ボイヤーライン「Zeitschrift für Deutschkunde. Forschungen und Fortschritte」H・グリム「Geist der Zeit」、W・ドオナアト「戦争の年 1940 年初 3 ヶ月間 に於ける独逸の文化生活」友枝高彦「日独文化協会最近の事業」E・E・ドウィンガー「小説・金の時計」「寄稿家点描」「編輯後記」「編輯後記」によると、この年の 4 月中旬河口湖畔で開かれた第一回日独学生大会を記念してその意義を一般に明らかにするために特集号としたという。イエーナ大学教授 B・パウフの寄稿はドイツの哲学と思想に思いを寄せるすべての人の喜びであろうという。

第 1 巻第 3 号（昭和 15 年 10 月 31 日発行）ニコライ・ハルトマン「独逸に於ける新存在論」、書評としてグラーフ・フォン・デュルクハイム「R・ベンツェ『大独逸国に於ける教育』」嘉門安雄「美術書の中から」ヨーゼフ・ウィルツ「L・F・クラウス『北方民族精神』」H・G・ザイラー「M・ミランコウィッチ『数理学的気候学及び気候変遷』」H・G・ザイラー「R・ダッケエ『地球及び生物の先史より』」ディートリッヒ・ゼッケル「木村・相良共著『独和辞典』」。服部龍太郎「ドイツの時局流行歌」尾高尚忠「滞独雑感」W・ドオナアト「1940 年第二季に於ける独逸の文化運動」荒川光雄「日独文化協会最近の事業」、ハンス・グリム「小説 人殺しの墓」雑誌紹介として W・ドオナアト「Nationalsozialistische Monatshefte」H・グリム「Zeit der Geist (Wesen und Gestalt der Völker)」「編輯後記」
「◇本号はニコライ・ハルトマン教授が特に本誌の為に執筆された論文『独逸に於ける新存在論』を特輯しました。その透徹せる論理と独自の立場に従って纏められたこの一篇は、同教授最近の思想を理解するに又となき好論文であります」。

第 1 巻第 4 号（昭和 16 年 1 月 31 日発行）ペーター・ペーターゼン「独逸青少年の責任完遂教育」荒木光太郎「建設途上に在る欧州新経済圏」秋山英夫「文化と政治——ニーチェの周囲に於ける逍遙」ワルター・ドーナート「戦争の年一九四〇年夏に於けるドイツ文化生活」有馬大五郎「日独文化協会最近の事業」書評として相良守峯「F・クノル『中世文学の精神的的研究』」、雑誌紹介として D・ゼッケル「Deutsche Vierteljahrschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte」H・エッカルト「Die Musik」など。

「編輯後記」に「◇イエナのフリードリヒ・シラー大学教育学の教授ペーターゼン博士の、青年の責任感教育に関する論文は、多忙中を特に本誌の為に執筆されたもので、学園新体制の実施が焦眉の問題となつてゐる我国の教育界に示唆する所多いと信じます。◇本誌第一巻は此の第四号を以て終ります。顧れば創刊以来日独の関係は親善の一路を辿り、東亜及び西欧に於ける両国の指導的地位は愈々確立されました。此時に当り、本誌はその使命の重大性を意識し、来るべき第二巻に於ては更に澁刺たる意気を以て精進し度いと思ひます。」とある。

第 2 巻第 1 号（昭和 16 年 6 月 16 日発行）上村清延「独逸民族主義の作家コルペンハイヤーの世界観と日本精神」石中象治「ドイツの戦争文学」B・エーヴァイスマイヤー「第三帝国の文芸及び文芸奨励」ヨハネス・シックス「独逸に於ける外国学」、小説にハインリッヒ・ゾーンライ「フンテマン先生の母と世界大戦」。

「編輯後記」に「◇本誌には現代独逸文壇第一流の大家コルペンハイヤーの世界観と日本精神と題し、上村清延教授の玉稿を得ました。上村教授はコルペンハイヤーに関し近く力作

御発表とかに承りましたが、その一端の掲載方を快諾されたことは独り本誌の喜びだけでなく広く日独文化の為め慶賀の至りと存じます。◇日独両国夫々の生命圏に於て新秩序建設に邁進しつつある折柄戦争と文学なる問題はその意義頗る重且つ大と思ひますが、戦争文学に造詣深き少壮学者石中教授の玉稿は現代戦争文学へのよき指針と存じます。小説ゾーンライ作『フンテマン先生の母と世界大戦』（高橋義孝教授訳）と併読下さい。」とある。

第2巻第2号（昭和16年7月31日発行）篠田秀雄「戦争と哲学」カール・リンネバッハ「クラウゼイツと大独逸解放戦争」木村民蔵「機械化部隊とは」小野秀雄「戦時下に於ける独逸の宣伝組織と其の実際」。〔小説〕ハンス・フランク「片目の白馬」。

「編輯後記」「◇ヨーロッパ情勢は独ソ開戦によってまたもや一大変転を来し、アメリカまた参戦の一步手前にあるかの如き形勢を示し、ここに世界的動乱が展開されようとしてゐます。この世界的大動乱を克く乗り切り、世界国家としての存立を確保し、名誉を維持し、文化を擁護促進するには強大な国防力と熾烈な闘争精神、民族精神の奮起を前提とし、戦ひには飽くまで勝たねばならぬこと言ふまでもありません。これが為めには自国々防体制を整備すると同時に他国のそれを批判検討し長所を採り、我が短を補ふはまた必須の条件かと思ひます。この意味に於て本誌は従来の方針から一大飛躍を試み、今回ドイツ国防科学を紹介し我が国防政策への一助たらんと致しました」。

第2巻第3号（昭和16年10月31日発行）ユリア・ツォツケル「日本文化の特質」クルト・ワグナー「新ヨーロッパ技術の方向」二階堂行徳「独逸に於ける人造石油」杉本豊治「独逸の代用品に就いて」宮原武雄「タイ国に於けるドイツの経済的活動」、書評として丸山国雄「万葉図録」、〔小説〕ワルター・ブレーム「二つの義務」。

「編輯後記」「◇…前号は各方面よりの御好評を得ましたが、本号には予定通り戦時下ドイツの工業界を専門的立場から概観して頂きました。就中代用品工業、人造ゴム、友邦泰国に於けるドイツ資本の活動に関する論文は現下必読の文字と思ひます。◇特に財団法人国際文化振興会から裏に同会が皇紀二千六百年奉祝記念事業として汎く世界各国から募集した論文中、欧州三等入選のフォッケル女史の応募論文掲載発表の需がありまして、誌上一段の異彩を添へることになりましたに就いては、同会の御好意深く感謝の意を表します。◇女史の日本文化理解の奥深さに驚嘆すると共に、日本民族の将来に対する女性らしい期待は本邦ドイツ文化研究熱にも更に拍車を加へることゝ考へます」。

第2巻第4号（昭和17年1月31日発行）三井高陽「切手と総力戦」アルフレッド・クレチメル「独ソ戦三ヶ月の経過に就いて」クレーケル「闘争者の本質について」江沢譲爾「ドイツ地政学的发展」エディット・ベルゲル「ドイツの母親教育」吹田順助「現代ドイツ文学思潮」濱田常二「戦時下独逸の文化活動」。

「編輯後記」「◇本号は戦時下ドイツの文化事情に関するテーマを取上げました。特に三井男爵の切手と総力戦は今更の如く切手の持つ重要性を痛感せしめられ、ドイツの母親教育は我が国銃後女性にとって多大の示唆を与へるものと信じます。その他地政学、最近のドイツ文学思潮、ドイツ出版界の現状等力作を得ました。◇今や枢軸国の血盟は益々固く、愈々緊密を加へて参りました。（略）本誌に課せられた両国文化の交流といふ使命の大なるを感じます。このたび本誌編集部も拡大致しましたので、第三巻よりは一層の新味を添へることゝ信じます」。

第3巻第1号（昭和17年4月30日発行）ヘルムート・ウォールタート「欧州新秩序の建

設」ヘルマン・グリム「新ドイツに於ける雇傭関係の変遷」深見義一「独逸配給経済構成覚書」ヘルバルト・ツァヘルト「英国とヨーロッパ」クラウス・ウンゲウィッター「戦時下ドイツ化学工業の業績」ヘルマン・クラウエ「ドイツ繊維工業に現れた戦争の発展」、「日独文化協会彙報」。

「編輯後記」「◇地域こそ違へ、日本と其の立場が略同様である友邦独逸の経済界を詳細に検討することは、日本経済界にとって、以て他山の石とすることに充分足る事であらう。本号はこの意味で独逸経済特輯号として、本邦来朝中の独逸経済使節ウォールタート氏始め各界権威の玉稿を盛り得たことは編集部として誠に喜ばしいことである」。

第3巻第2号（昭和17年9月30日発行）ドクトル・G・W・エンゲル「技術発達の生長力とその種々相」ドクトル・アルブレヒト・マグヌス「文化要素としての独逸経済」ドクトル・H・ハーゲマン「戦時下の独逸航空工業」、書評として「現代ドイツ、その発展」（リシュタンベルク著、大野俊一訳）丸山国雄著「日独交渉史話」ほか。「日独文化協会彙報」（第二回日独学徒大会その他）

「編輯後記」「◇本誌には予告通りエンゲル氏以下ドイツ工業技術界の諸権威を労はし、戦時下ドイツ工業技術の諸部門に亘り解剖紹介して頂いた。大東亜戦下既に南方に於て力強い復興建設の譜奏でられつゝある今日、ドイツ技術界の最近趨勢を知ることは、広義の意味に於ける両国文化交流の一課題であらう。◇去る五月二十五日より一週間史の都滋賀県大津琵琶湖畔にて本協会主催の下に開催された第二回日独学徒大会は終始有意義な報告、討論、見学によって両国の文化交流に資する所あったが、この成果は啻に大会参加学徒のみに記念されるべきものでなく、参加学徒はこれをその同朋に広く伝えてこそ茲に始めて両国の理解、親善の絆は益々固められるであらう」。本号より＜伯林日本学会＞との共編となった。

第3巻第3号（昭和17年11月30日発行）桑木巖翼「日本思想界に及ぼしたる独逸哲学の影響」新関良三「日本劇壇と独逸戯曲」丸山国雄⁴⁾「日独交渉を顧みて」山田幸三郎⁵⁾「我国に於ける軌近の独逸語研究」遠城寺宗徳「『ナチスドイツ』医学の飛躍」茅野簫々「最近我国に於ける独逸文学研究の概観」クルト・マイスナー「日本に於けるドイツ人」エルウィン・ヤーン「ケンペルとシーボルト」。

「編輯後記」「◇読書の季節到って、本号は日独精神文化の交流を中心問題とした。先づ桑木博士は独逸哲学と日本思想界の交流影響を独特の立場より検討され、新関博士の論文は我が劇壇今後の進路に一大光明を点ずるものと言ふべく、山田、茅野両教授には夫々我が国に於ける独逸語、独逸文学研究といふ巨大な、而も最も意義あるテーマについて御願ひした」。

第3巻第4号（昭和18年3月11日発行）エドアルト・シュプランガー「現代に於ける古典主義者の意義」秋山英夫「ニーチェ哲学に於ける『身体』と『姿勢』」平沼良「ヒトラー青年団の体育」ハンス・グリム作「Der Richter in der Karu」翻訳懸賞発表（上村行徳⁶⁾訳、海老原晃訳、内藤好文訳）。

「編輯後記」「◇シュプランガー教授の論文は、ともすれば忘れられ勝な現代殊に戦時下に於けるクラシカーの意義評価に就いて含蓄多き見識と言ふべく、大東亜戦下本邦古典の再検討活発なる折、好個の指標を与へるものと信ずる。◇秋山氏のニーチェ哲学に関する考察もこの意味に於て我が哲学界に示唆する所多きを疑はない。◇裏に本誌が募集した「Der Richter in der Karu」に対しては厳選の結果遺憾乍ら当選翻訳作品を見なかったが、選外佳作として三篇を選定し、本号に掲載した。言葉の力、文章の魂はいつの世を通じても動かす

ことは出来ない。ドイツ語に対する我が国翻訳者の感性の各種のニュアンスはドイツ語研究に興味ある幾多の課題を投ずるであらう」。

第4巻第1号(昭和18年9月1日発行)＜日独会館落成記念号＞会長大久保利武「新館落成に当りて」理事長侯爵井上三郎⁷⁾「日独会館の建設に就いて」駐日独逸大使ハー・ゲー・スターマー「献辞」マックス・プランク「精密科学の意義とその限界」シンチンゲル「ドイツ的人間の本質と運命」中山治一「ヨーロッパの精神史より見たるドイツ的思惟」相良守峯「文学に現はれたドイツ的性格」、新刊批評として「上原専禄著『中世独逸史研究』」ほか。座談会「ドイツ人の性格」。

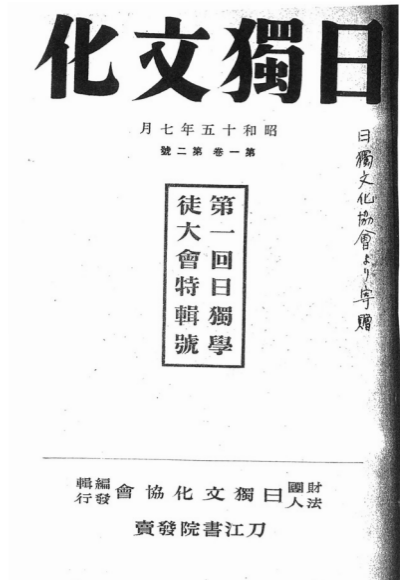
「編輯後記」「◇待望の日独会館が竣工して協会一家はこの新居に移って来た。こゝは靖国神社も間近く、会館のすぐ前は水清きお濠を隔てて、そのかみの千代田の城の常磐の松も美しい。館員一同、身も心も清々しく澄み渡る思ひである。ただ決戦下のこととて家具調度の類が未だ整はず、落成式を挙げるに至らない。◇その代り、本号にはマックス・プランクの『精密化学の意義と限界』シンチンゲルの『ドイツ的人間の本質と運命』、シュナイダーの『ゲーテとドイツ国民音楽』等それぞれ力の籠もった論文の翻訳が集まったし、相良氏、中山氏の玉稿を得て論文陣は整ったと思ふ。◇協会図書部員村内政雄君は六月十日応召された。職員一同会館前に整列同君の壮途を祝した。こゝに附記して置く」。

第4巻第2、3合併号(昭和18年12月20日発行)＜中世ドイツ研究特輯＞大類伸「中世ドイツを想ふ」山中謙二「中世ドイツに於ける帝権と教権」石原謙「中世独逸の基督教」高村象平「独逸騎士修道会の盛衰とその事業」増田四郎「中世に於ける独逸民族の東方発展」今来陸郎「ハンザ同盟と中世ヨーロッパ商業」雪山俊夫⁸⁾「中世隆昌期の物語文学とその背後」吹田順助「ヘルデルリンと現代」、書評として林健太郎著『独逸近世史研究』ほか、「侯爵大久保利武閣下を悼む」。

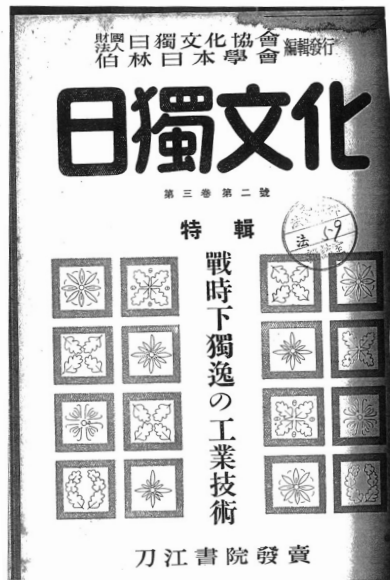
「編輯後記」「◇世界戦局は日毎に苛烈の一途を辿りつつあるが、日独両国は益々結盟の固きを示し鉄桶の陣を誇示してゐる。文化交流、提携強化の衝に当る本協会の使命も亦愈々重きを加へ来った。この時に当り盟邦ドイツに対する理解の更に深からんことを期して『中世ドイツ研究』を特輯した。◇近代の克服、終焉、延いては中世回帰の声を聞くこと久しいが、本特輯が中世認識の一助ともなり、又ドイツ的なものの源流をそこに探る手だてともなれば非常に幸である」。

第4巻第4号(昭和19年7月30日発行)＜日独共同戦争目的に就いて＞石井正美「世界戦局と日独共同戦争の意義」「懸賞論文募集の趣意」政治的観点より(1等村上信彦、2等成田寿治)経済的観点より(1等佐々生信夫、2等松崎只市)文化的観点より(1等篠原斉子、2等狩野一郎)授賞式記事(式辞・井上三郎、第一部審査概評・矢部貞治、第二部審査概評・荒木光太郎、第三部審査概評・桑木巖翼)R・シュバーン「戦時に於ける党の任務」。

「編輯後記」「◇『日独共同戦争目的に就いて』の論文募集は別項の如く大なる成果を収め、こゝにその一、二等当選論文を以て『日独文化』の特輯号を編むこゝとなった。本論文募集に就いては改めて言ふまでもなく、決戦中の決戦を戦ひつゝある日独両国の提携の意義を最も端的に示す可く広く国内の知識人に呼びかけたものであったが、これに対し全国各地から熱誠なる支持を寄せられたことは真に感謝に耐へぬところである」。



1 卷 2 号 (昭15・7)



3 卷 2 号 (昭17・9)



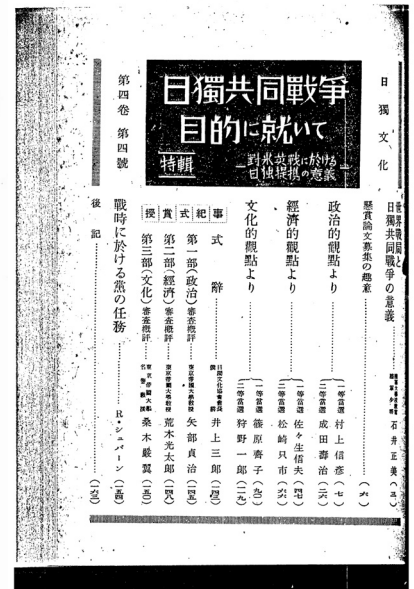
3 卷 3 号 (昭17・11)



3 卷 4 号 (昭18・3)



4 卷 2、3 合併号 (昭18・12)



4 卷 4 号 (昭19・7) 目次

ここにはタイトルを見ただけでも興味ありそうな論文やエッセイが並んでいる。その内ここでは筆者の最も関心のある「日本におけるドイツ語学習史」の問題に属する二つの論文を取り上げ簡単に紹介してみたい。第3巻3号掲載の丸山国雄の「日独交渉を顧みて」と山田幸三郎の「我国に於ける 晩近の独逸語研究」がそれである。

日本では明治以来ドイツ語は英語に次いで熱心に学んできた。丸山によると、その原点は幕末にあったという。即ち、プロシャ（プロイセン）政府は、安政6年（1859）東洋諸国へ使節を派遣して、これらの諸国と修好通商を開始しようとした。そしてオイレンブルク伯を団長とする使節一行の乗艦アルコナ号は万延元年7月19日（1860年9月4日）に江戸湾に入航した。同月23日使節一行は品川海岸に上陸し、赤羽接遇所に入り、中庭にプロシャ国旗を掲揚した。これ以後日独両国の代表者の間で条約商議が開始された。その際オイレンブルク伯は幕府に電信機を贈った。この時使節は電信機を献納する前に、その使用法を日本人に伝習するために幕府に人選を依頼した。幕府はそれに応じて蕃所調所に勤務していた市川斎宮と加藤弘蔵（弘之）とを使節の宿である接遇所に派遣した。二人は使節団一行の随員であるフェルディナンド・フォン・リヒトホーフェン（地質学）及びブンゼン（使節付武官）から電信機の使用法とドイツ語を教わったのである。その時幕府はドイツの学問も学ぶように命じた。ここに我が国の独逸学発達の端緒が開かれたのである。かくして幕府によって基礎づけられた独逸学は明治になってから急速に発展し、今日に至ったのである。

なお「日独交渉を顧みて」としたのは、丸山は既に自著『初期日独通交小史』（昭和6年）及び『日独交渉史話』（同16年）においてこの問題を詳しく扱っていたからである。

山田の論文は明治以降のドイツ語の学習研究の発達を人物や書籍・雑誌等を通して見ている。彼によると、明治の最初期には独語の学習は英語や仏語に比べて遅れて出発したが、明治4年（1871）の普仏戦争でプロイセンがフランスに大勝してから独語と仏語の地位が逆転した。その後は急速にドイツ語熱が高まっていった。即ち、ドイツは国体・国民性の上で日本と共通する点が多いこと、学術と国力においても断然仏国を凌駕していることが分かってくると共に仏国よりもドイツが重視されるという結果に立ち至った。こうして日本では独語は世界語たる英語に次ぐ外国語として盛んに学習・研究されるようになった。

こう述べて本論に入る。文法書では『三太郎文法』（これは大村仁太郎、山口小太郎、谷口秀太郎というドイツ語界の先達の共著『独逸文法教科書』の通称）がある。上巻品詞篇、下巻文章論から成り、明治27年に出版された。度々改訂を加え長く用いられていることは本書の価値を証明している。大正14年の時点で第43版に及んでいる。次ぎに大正5年に初版を出した片山正雄著の『独逸文法辞典』は頗る便利なものとしてその有用性を強調している。専門書としては『ドイツ文法の根本問題』（片山尚著）『ドイツ文章論』（相良守峯著）がある。その後文法書類は雨後の筍のごとく出たが、めばしいのは亀井藤太郎の文法書、水野繁太郎の自修書、佐久間政一の『独逸文法講話』等であるという。雑誌では、明治31年に三太郎文法の著者によって「東洋唯一、独和新紙」と銘打って創刊された『独逸語学雑誌』は高級雑誌で、大正3年に青木昌吉助教授を中心とする東大独文科系の人々によって創刊された『独逸語』と並んでドイツ語学習研究ために貢献する大であった。昭和に入ってからには権田保之助主幹『独語研究』や関口存男主幹『ドイツ語』『独語文化』もそれぞれ特色があった。また京都では大正3年に藤代禎輔博士の周辺の人々によって『Hand in Hand』（南江堂）が創刊された。以下、詳細は省くが、同様に辞書、講習会、ラジオ独語講義、和文独訳書、

独逸語史及び語源研究、高級教材、関口氏の三部作などの項目で記述している。全体として短くはあるが明治以降のドイツ語学習・研究の概略をよく捉えた好文章と言えよう。だが今後の展望のところで、「我が国の外語学は欧人のそれと違って会話よりも書物の理解が定石であり本道である。従って『日本人の語学は日本人教師の方がよい』と言った明治の先覚者岡倉天心や、我が国英語発音学の顧問だった英人パーマーの意見に我らは賛同を惜まない。少くも外人教師につくべき時代はもう過ぎたと信ずる。」と述べているのは、グローバル化時代の今日では通用しないのではまいか。

それはともかく、この二つの論文はいずれも日独が相提携して世界を相手に戦っていた最中に書かれたものだ。そうした状況をそれぞれの著者どのように見ていたのか、各文末で結論的に述べているので引用してみよう。

「今や日独両国は他の盟邦諸国と共に、世界史上新なる時期を劃すべき一大聖戦に直面し、両国々民は、各々その目的完遂のために邁進しつつある。皇軍の赫々たる武勲は、独逸軍の猛進撃と共に著々とその戦果を拡大してゐる。かゝる時両国国民相互に於ける 深き理解と強き交りは、初期の目的達成のため力強き活力を与へるものである」（丸山国雄）。

「我らは今日その忠誠の念に於て、祖国愛に於て、剛健素樸なる民族性に於て互に最も親近なる東西の二大国民として共同の理念の下に固く相提携して世界新秩序の建設に乗り出してゐるではないか。仏国すらも旧の勢力に復興するかは疑問である。英国に於ては一旦敗れたら之また同じく疑はしい。独り独逸人のみが彼らに失はれる事がないやうに内在してをる理想主義によって既に数回かかる敗戦を切り抜けて来たとは現代の預言者ヒルテイが明言した処である。ナチスの新興独逸はこの預言の真理を四十年後の今日新らしく実証してをる。而してこの独逸が我らの盟邦ではないか。我国今後の独語研究の隆盛といふ、我らの予測はこの事実の上に立脚するものである」（山田幸三郎）。

ところで第4巻2、3合併号にあるように長年日独文化協会会長の地位にあつて、功績の大きかった大久保利武が昭和18年（1943）7月13日に死去した。その後任には侯爵の井上三郎が就任した。

6. 終刊号（第5巻第1号）（昭和20年2月1日発行）について

日独両国とも敗戦の色濃くなった年に発行されたもので、100頁と薄くなつていて戦況の苛烈さが雑誌の発行も困難のなつていたことが誌面からも伝わってくる。それでも「ドイツの戦力分析」を特集している。

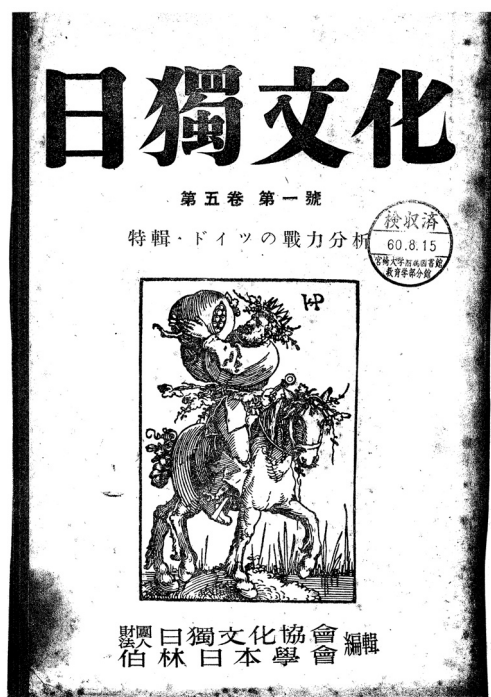
「編輯後記」は次の通り。

◇世界戦局は、正に決戦中の決戦といふべき段階にあり、日独両国は緊密なる提携の下に東西相呼応し、夫々最後の勝利獲得へ健闘邁進しつつある。此の秋に当り、盟邦ドイツの戦力の実体を正確に認識しておくことは、我々が、今後益々苛烈深刻を極むるであらう世界戦局の動向に処して愈々必勝の信念を深め、戦争完遂の決意を新たにする上には是非共必要である。

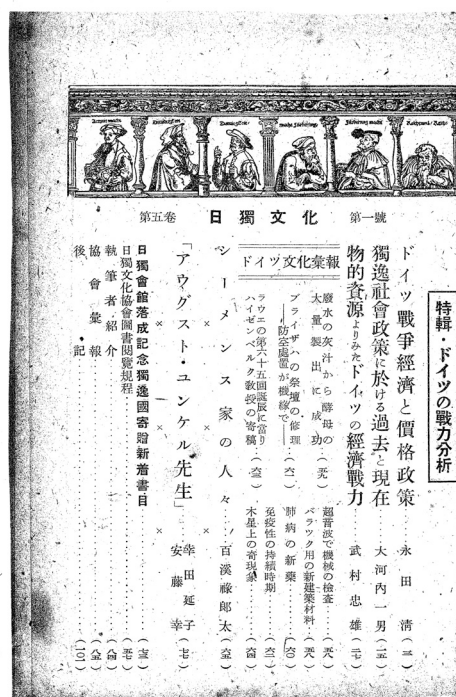
◇我々は茲に「ドイツの戦力分析」を特輯し、財政金融・人的資源・物的資源の三重要面よりドイツの経済戦力を検討した。国土に敵を邀へ連日大空襲に曝され乍らも、尚よく

試練に耐へ、その熾烈なる反撃に敵味方を問はず正に世界の注目を集めつつあるドイツ敢闘の原動力、強靱異常なる国力の経済的基礎は之によって余すところなく闡明されたと思ふ。

◇其他、百溪氏に依るドイツ軍需工業の重鎮「シーメンス家」の紹介は時宜に適したものであり、裏に逝去された東京音楽学校教授アウグスト・ユンケル教授を記念する幸田延子、安藤幸御姉妹の追憶談は本号に錦を添へられたものとして感謝してゐる。(後略)



終刊号 (昭20・2)



同号目次

連日の空爆に曝されながらも、なおよく試練に堪え正に世界の注目を浴びていた盟邦ドイツの敢闘力の原動力はどこにあるのかを専門家に依頼して解明しようとしている。ドイツの世界的に有名な多国籍企業シーメンスのルーツについて語った百溪禄郎太の「シーメンス家」は正に時宜に適っていた。百溪は「執筆者紹介」によると当時シーメンス・シュッケルト電気株式会社電気技術部長で、弁理士であった。

幸田延子・安藤幸姉妹（共に文豪幸田露伴の実妹）の「アウグスト・ユンケル先生」は、前年（1944）1月5日に死去した日本クラシック楽壇の恩人ユンケルの思い出を自由に語ったもので、戦時色が濃くなった本誌に錦を添えていて、文化を感じさせた1篇であった。

巻末の「日独文化協会彙報」は昭和18年及び19年度の同協会の諸活動を報告したもののだが、これを見ると戦時下にあっても盛んな動きが見られる。例えば、ベルツ博士記念会、コッホ博士記念会、文楽鑑賞、日独伊婦人会、独逸少年少女靖国神社参拝、独逸著作権問題懇談会、懸賞論文の募集、日独親善茶会、リヒアルト・シュトラウス生誕八十年記念音楽会、在留独逸国人の生活指導、第二期「綜合独逸講座」の開催、日独懇話会、シューベルトの夕、独逸映画フィルム及び日独会館諸施設の貸与、役員の対独放送、ツアヘルト主事講演等々である。加えて支部（近畿、宮城、新潟、富山、金沢、広島、熊本）の報告も見られる。

なおこの彙報には書かれていないが、昭和 19 年には『日独文化協会会員名簿』が発行された。会員にはゲルマニストが多く、戦後の日本独文学会会員名簿を思わせた。

だが、現実には上記の「編輯後記」にあるように、世界の戦局は決戦中の決戦という段階にあり、雑誌の発行どころではなかったと思われる。果たして『日独文化』も本号を以て、予告なしに廃刊した。

そして3ヶ月後の昭和 20 年（1045）5 月にはドイツが降伏し、日本もさらに3ヶ月後広島、長崎への原爆投下により8月15日に無条件降伏した。かくして20世紀最大の事件であった第二次世界大戦は終わった。

7. 終わりに

日独文化協会は創設以来十余年に亘って、日独両国間の文化的理解と親善に貢献したが、昭和 11 年 11 月 25 日の日独防共協定と同 13 年 11 月 20 日の同協定の第 2 周年に当たっての日独文化協定の締結を機として文化協会の任務はますます重大となり、その活動範囲も拡大した。それに応えるために昭和 15 年 4 月定期刊行の協会の機関誌『日独文化』創刊に至った。

雑誌は日独の文化、経済、軍事、交流等に関する記事で満たされていた。当時日本は日中戦争から太平洋戦争へ向かう時代にあり、雑誌にはその影響が反映されていた。日独とも戦局は苛烈さの一途を辿り、雑誌の発行も困難になったが、関係者の努力によりよく持ちこたえた。だがそれにも限界があり昭和 20 年 2 月発行の 5 巻 1 号を以て予告なしに廃刊した。結論として、日独文化協会の機関誌『日独文化』はこの間の日独間の提携・交流を知る好資料であり、もっと注目されるべきであろう。本稿はその概略を紹介したに過ぎない。注釈も不十分なものに終わった。瞥見とした理由である。とにかく『日独文化』の母体である日独文化協会が昭和戦前期の日本において果たした役割の大きさには驚かされる。同協会についての本格的研究が望まれる。

注

- 1) 友枝高彦（1876-1975）：日本の倫理学者。五高を経て東大哲学科卒。五高教授、東京文理科大学教授。日独文化協会の理事として日独文化交流に多大の功績があった。
- 2) プラーゲ旋風：旧松江高や一高のドイツ語教師で、ドイツ大使館などに勤務したドイツ人ヴィルヘルム・プラーゲ（Wilhelm Plage 1888-1969）が、のちに欧州の著作権管理団体の代理人となり日本の放送局、演奏家、出版社に対して次々と訴訟を起こし、高額の著作権使用料を請求した事件。日本の関係者は対策に苦慮したが、著作権思想の普及には大いに貢献した。
- 3) ブリティング（Georg Briting, 1892-1964）：近代ドイツの詩人、作家。レーゲンスブルク生まれ。第一次大戦に義勇兵として出征、塹壕の中で3年間の苦闘を嘗めた。1918年、重傷を受けて帰還。1921年以来ミュンヘンに移って、作家生活に入った。
- 4) 丸山国雄（1905-1980）：独学史家。維新史料編纂官を経て山梨大学教授。著書に『初期日独通交小史』『日独交渉史話』『日独交通資料』（全6輯）などがある。
- 5) 山田幸三郎（1887-1972）：ドイツ語学者。一高文科を経て、大正4年7月東大独文科

卒。七高造士館教授、東京府立高校教授を経て、戦後は都立大学教授。代表作『独逸語発達史』。敬虔な無教会派の伝道者でもあった。

- 6) 上村行徳(1902-1998)：独語独文学者。鹿児島県人。七高造士館を経て東大独文科卒。ドイツ留学後、昭和7年七高教授就任。戦後も鹿児島大学教授としてドイツ語・文学を講じた。シラー研究家。母校愛の名物教授で知られた。
- 7) 井上三郎(1887-1959)：日本陸軍の軍人、最終階級は陸軍少将。貴族院議員。侯爵。桂太郎の三男として生まれる。義父井上馨、養父井上勝之助。陸軍中央幼年学校を経て、陸軍士官学校卒。その後陸軍大学にも学んだ。
- 8) 雪山俊夫(1879-1946)：近代日本の代表的独文学者の一人。富山県出身。一高文科を経て、東大独文科においてカール・フローレンツ、藤代禎輔の指導を受けた。明治39年卒業後、四高、六高教授を歴任。大正10年文部省留学生としてドイツに留学、中世ドイツ語を学ぶ。帰国後京都に移住、三高講師、京大文学部講師に就任。日本ゲーテ協会の設立に尽力。『ニーベルンゲンの歌・基礎の研究』により文学博士(昭和10年)。死後、蔵書は九州大学、神戸大学、富山大学に寄贈、「雪山文庫」として後進のゲルマニストために役立った。

参考文献

- 1) 『日独文化協会事業報告 昭和十五年度』国立国会図書館デジタルコレクション。
- 2) 財団法人日独協会『日独文化交流の史実』1974年。
- 3) 『ドキュメント昭和9 ヒトラーのシグナル』角川書店、1987年。
- 4) 『リヒトホーフェン 日本滞在記 ——ドイツ人地理学者の見た幕末明治』(上村直己訳)九州大学出版会、2013年。

付記

雑誌の調査に際しては下記の図書館を利用した。

国立国会図書館、一橋大学、九州大学、宮崎大学各付属図書館。

本稿は2016年12月10日日本医科大学において開催された日本独学史学会で口述発表した原稿に加筆したものである。なお、引用に当たっては、原則として漢字は現代表記に改め、仮名は原文通りとした。